人と建築を結ぶ ― ゆう建築設計の

時空読本

No. 36
2023. 2
Jikūdokuhon

医療特集

思いと建築

株式会社 ゆう建築設計
Tokyo Office　東京都港区芝大門1丁目4-8　浜松町清和ビル7F　〒105-0012
TEL 03-6721-5430　FAX 03-6721-5431
Kyoto Office　京都市中京区堀川通錦小路上ル四坊堀川町617番地　〒604-8254
TEL 075-801-0022　FAX 075-801-8290
E-Mail：office@eusekkei.co.jp

https://www.eusekkei.co.jp/

2つの病院を移転統合し、細やかな配慮と能率的な運用のできる病院に

01 社会医療法人 鴻仁会
岡山中央病院 → P.4

人口減に対応する“病院らしくない病院”を実現したい

02 医療法人社団 大谷会
島の病院おおたに → P.6

医療・介護・予防の様々なサービスを提供できる建物を実現したい

05 医療法人 歓喜会
辻外科リハビリテーション病院 → P.12

医療特集 思いと建築

「医療」と「建築設計」とは、患者を満足させる技術を提供すると共に心も癒すという点で、よく似ています。建築設計ではただ単に図面を描くということのほかにも、使いやすさや心地よさを考えながら、時には実現不可能と思われる厳しい条件に対しても複雑なパズルを組み立てるよう建築による解決方法を見出しています。そんな建築設計の方法にはこれといった正解はありません。いろいろなシーンに遭遇するなかで常に最適解を模索し、決断をする。それは有効な治療方法を見出せなくても患者の苦痛や心配ごとを和らげるために、持っている技術を総動員することにも近いのではないでしょうか。

事業者の病院にかける思いとかたちにする建築の役割

医療建築設計においてその決断の大きな手掛かりとなるのが、病院側のこうしたいという「思い」です。思いの種類は病院全体の方針を決めるような大きなものから、使い勝手や性能を満たすための詳細な要望まで様々です。

この特集では、そんな病院側の様々なリアルな「思い」とその実現に向けた7つの取り組みをご紹介します。ここには病院づくりのヒントがたくさん詰まっています。みなさんのお役に立つエピソードが見つかるでしょうか。

増床を機に、医業収益の増収のため、医療サービスの拡充を図りたい

03 社会医療法人社団 正峰会
神戸大山病院 → P.8

敷地に余裕がない状態で、どのように建て替えを行えばよいのか

04 医療法人社団
綾瀬病院 → P.10

建て替えたいけど、建設費高騰やコロナ禍の影響が心配だ

06 医療法人 匡慈会
伏虎リハビリテーション病院 → P.13

初期投資を抑えて透析部門を新設したい

07 医療法人社団 frontier.MED
東京透析フロンティア大塚駅前クリニック → P.13

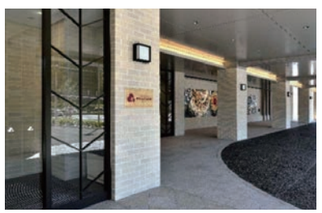
01 2つの病院を統合し、運用性と居心地を共存させる

社会医療法人 鴻仁会 岡山中央病院

シニアチーフアーキテクト　河井 美希

左／既存病院　右／今回増築した東館

地域医療支援病院として岡山市の急性期診療医療を担う「岡山中央病院」に、回復期・慢性期医療、透析治療を行ってきた「岡山中央奉還町病院」が移転統合され、いくつかのハード上の課題を克服するとともに、それぞれが持つ医療サービスがさらに強化されました。統合に際しては新たに5階建の“東館”を増築。中央奉還町病院からは回復期リハビリテーション病棟と透析センターが移転し、中央病院8階にあった産科病棟は産科・婦人科外来と同フロアの東館2階に移動しました。東館には十分なフロア面積を確保することができ、これまで構想されてきたさまざまな医療サービスが実現しました。リハビリセンターでは障害の抱えての生活を考えやすく、豊かな人生の再構築を補佐する場所 をつくりました。透析センターでは長時間にわたる治療の苦痛を 和らげるためのいろいろな工夫をしています。産科は”岡山中央病院 バースセンター“としてブランディングされ、幅広い年代の女性に好まれるような病棟づくりと産科病院としての機能を強化しました。 病院の各所には副理事長のご友人であるアーティストの力強い作品が掲げられ、建築に華を添えています。



左／東館車寄せ。バースセンターエントランスの奥に見えるのは白石正子氏による陶板作品「生命の輝き」 上／QUA DESIGN styleによるバースセンターロゴマーク

細やかないたわりで“特別感”を演出
[バースセンター]

自然光があふれるバースセンター専用のエントランスホール。その光に導かれるようにして階段を上ると病棟の入口があります。病棟は厳重なセキュリティがかけられ、新生児の面会は病棟に入ることなく専用のコーナーで行われます。クラシカルな要素を取り入れて落ち着きと可愛らしさが同居した病棟は、幅広い年代の女性に好まれ、大切にされていると感じられるような細やかないたわりにあふれています。

社会医療法人 鴻仁会
岡山中央病院

●事業者の思い

「2病院を移転統合し、より細やかな配慮と能率的な運用のできる病院に」

2病院の統合をきっかけに既存の課題の解決と細やかな医療サービスの充実を図り、患者に喜ばれるとともに職員が誇りを持てるような病院としたい。回復期リハビリテーションは、既存の建物では思い描く十分なリハビリや入院環境の提供ができていなかったため、その人らしい生活ができるように自立支援となる場所を提供したい。透析では現場のニーズをしっかりと実現し、患者に選ばれる治療の場を。そして産科はこれまで信頼と実績を培ってきた岡山中央病院産婦人科のブランドをよりわかりやすく打ち出していきたい。

●建築の役割

「患者も職員も共に“楽しみ”を感じるような空間を創りました」

シニアチーフ
アーキテクト
河井 美希

増築する新棟には主に異なる3つの用途が入ります。各々利用される患者像は異なりますが共通して提供したい空間は「やすらぎと楽しみ」が共存した場所です。医療現場で求められる機能はしっか りと満たしつつ、各用途の患者像やシーンを具体的にイメージして、それぞれにふさわしい空間づくりを行いました。

過ごし方の選択ができる
[回復期リハビリテーションセンター]

屋上リハビリ庭園

家具で区切られたゆったりとした病室、スタッフや仲間とおしゃべりしながら洗濯物を畳んだり絵をかいたりするデイルーム、屋外の空気を吸って体を動かすことができる屋上リハビリ庭園など、患者自身で過ごし方を決めることができる場所が豊富にあります。 病棟のどこでもリハビリができるように、廊下の床には距離の目安となる模様を施し、階段室は自然光を採り入れ勾配を緩くするといった工夫を行っています。

充実のチェアまわりとスタッフベース
[透析センター]

チェアはプライバシー確保と飛沫感染対策を兼用した低いパーテションで囲われています。パーテションにはベッドでの出入りを考慮した可動式タイプや向かい合わせとなる患者同士の視線を遮るスライドタイプもあります。各ブースには手元調光付き照明と専用キャビネットが置かれて快適な治療空間を提供しています。視界が良好な島状のスタッフベースのカウンターには、綿密な打合わせを経てモニターやタブレット置き場、手洗いなどが機能的に作られました。

02 ロケーションの魅力を活かし遠方の利用者を呼び込む

医療法人社団 大谷会 島の病院おおたに

チーフアーキテクト　玉井 英登

地方の病院において安定して長く医療を提供していくためには、収益を向上させるための様々な仕掛けを講じる必要があるのではないでしょうか。

島の病院おおたには、江田島という瀬戸内海に浮かぶ島にある、目の前にビーチの広がる魅力的な場所に計画された病院です。この地で医療を提供し続けていくために、島外からの利用者も積極的に呼び込んでいきたいというのが計画にあたってのひとつのテーマでした。そこで魅力的なロケーションを活かし病院らしくないリゾートホテルのような病院を目指すこととなりました。

プライバシーを重視する入院患者に対応できるよう、全体で約6割という高い個室率となっている病室構成。外来・病棟と利用者の動線を考慮して分散配置された、海を見ながら施術を受けられるリハビリ室。病院最上階に配置された、オーシャンビューの屋外テラスを有するホテルのレストランのような食堂。エステや温熱療法など特別な施術を受けられる自由診療部門などを計画し、少し遠くても利用してみたくなる雰囲気を作り出しています。

デザインにおいても、島の自然にある砂・石・木の素材感を持つ外装材と、周辺環境に合わせた各種のアースカラーを組み合わせた特徴的な外観とし、内観はオリジナルの波のモチーフを施した内装材で海を表現し、そこに島々をイメージした家具を配置することで瀬戸内の情景を表現した待合を計画するなど、内外共にホテルを意識したものとなっており、この病院が身近にはない特別な病院であることを演出しています。

このように都心から離れた一見不便に見える土地でも、その土地の魅力を活かすことで、人を呼び込む様々な試みを実行することができるのです。

海が目の前に広がる「島の病院おおたに」。この魅力的なロケーションを享受できるように設計を工夫した。呉市から車で1時間以内にあり、近郊からの利用も見込める。

医療法人社団大谷会
島の病院おおたに

●事業者の思い

「人口減に対応する“病院らしくない病院”を実現したい」

島の病院おおたには昭和18年より江田島の医療を支えてきましたが、老朽化や使い勝手の課題から同じ島内での移転新築計画を策定しました。島の高齢化率は40%を超え、10年後には1万人の人口減が予測される中、「島でねばる」ために何が必要なのかを模索しました。その結論は「島の環境」を活かし、島内はもとより近郊の方にも満足していただける“病院らしくない病院”を目指すことでした。

▼

●建築の役割

「土地柄を活かし、人々を呼び込む工夫を詰め込みました」

チーフアーキテクト
玉井 英登

病院の方々は、「これからの島の病院は地元利用だけでは立ち行かない」という強い危機感をお持ちでした。「島外からの利用者も積極的に呼び込みたい。病院らしくない、リゾートホテルのような病院にしたい」との思いを受け、遠方の方でも利用してみたくなる雰囲気になるよう、丁寧に医療環境を整備しました。海辺のロケーションを各所に取り込み、治療・療養のストレスを和らげるよう素材や設備を慎重に選び、寛ぎながら入院・通院ができるよう設計を工夫しました。

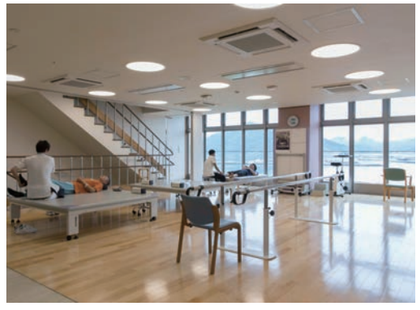
利用者とスタッフを引きつける空間

“島でねばる”ためには、島内外の利用者を呼び込むことに加え、職員の確保と長く働き続けてもらうことも重要な要素のひとつでした。そこで病室や待合、食堂などのパブリックなエリアはもとより職員専用のスペースでも快適な時間を過ごせるよう、ホテルの個室やラウンジのような内装を施しました。病院内には宿直や休憩、学習のための職員専用スペースを複数計画し、それぞれスペース的に余裕のある空間とし、この病院で働きたい、働き続けたいと感じてもらえるよう配慮しました。

ベッドサイドトイレの導入

においが気にならずホースが届く範囲どこにでもトイレを置くことができる水洗式ポータブルトイレ「ベッドサイドトイレ」を導入。自力排泄による生活の質の向上とリハビリ効果を見込み、専用の給排水管を全個室に設置しました。

日常にリハビリを取り入れる



リハビリエリアの計画を工夫し、生活と訓練の場のギャップを埋めました。たとえば歩行訓練用の階段では「階段を登ると気持ちのよい場所にいける」と患者さんのモチベーションを高めるよう、すぐ上階に海が見える食堂を配置しました。またスムーズな在宅復帰を促すよう、ADL訓練室をあたかも自宅の和室のように設えました。

03 建て替えを契機に医療サービスを充実

社会医療法人社団 正峰会 神戸大山病院

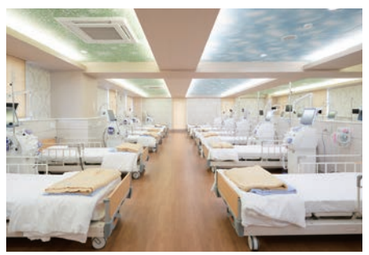
チーフアーキテクト　加藤 クリム

兵庫県神戸市での病院の建替計画です。神戸市兵庫区の神戸大山病院は築 30 年が経過しており、71 床から 120 床への増床を契機に、既存病院に隣接する敷地を購入。敷地を拡大し、全面建て替えを行いました。建替えに際し、増床と共に医療サービスの拡充を行い、緩和ケア病棟、透析、健診を新設しています。また、有料老人ホームを建物内に併設しています。

工事は 2 期、3 年に渡りました。1 期工事として既存病院の隣地に外来、病棟 (120 床の内 91 床)、手術部門、リハビリ等を整備し、新建物に移転後、既存病院建物を解体。 2 期工事にて健診部門、有料老人ホー ム、透析室、病棟 (残り 29 床) を整備しています。

最上階である 6 階には透析室 (20 床) を新設しました。 感染対策として廊下から直接入ることのできる陰圧個室を 1 室設け、透析室内の柱をなくし、スタッフステーションからの見通しの良さに配慮するなどの工夫をしています。また待合からは北側に六甲山地を望む素晴らしい景色が広がっています。

1 期工事完了時外観。左側が既存病院建物。 既存病院を解体し、2 期工事として 1 期部分に増築する。



階高を抑えることで設けられた 6 階に新設した透析室。室内に柱を設けずに見通しを確保している。

【敷地拡大での建替え】

- 敷地面積 約 600 m² →約 1,960 m²
- 延べ面積 約 1,700 m² →約 7,750 m²
- 緩和ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟、透析室、健診部門の新設
- 有料老人ホームを建物内に併設

社会医療法人社団
正峰会
神戸大山病院

●事業者の思い

「増床を機に、医業収益の増収のため、医療サービスの拡充を図りたい」

既存建物は他病院からの事業承継によるもののため、法人が考える医療サービスにフィットしたものではありませんでした。増床を機に、病院全体の機能強化を図り、外来診察室数の増大、検査体制の充実や透析部門、健診部門の新設を検討しました。そのプログラムのために、まずどれだけの敷地が必要か知る必要がありました。

▼

●建築の役割

「用地取得前から、収益性を踏まえた拡張パターンを繰り返し検討しました」

チーフアーキテクト
加藤 クリム

法人がイメージする医療サービスを提供することが可能か、敷地取得前から、敷地の拡大パターンに合わせて建物ボリュームの検討を繰り返し行いました。敷地面積約 1,960m² に対し、要求されたボリュームを納めるために様々な工夫を行いました。 また、2 期工事期間中の収益性の低下に配慮し、1 期工事部分の床面積を最大限確保し、既存病院の機能をすべて 1 期工事にて整備。病棟においては主に 4 床室を 1 期工事で整備し病床数を最大限確保しました。2 期工事部分は地下を設けない計画とすることで 1 期工事完了後からの工事期間を短くする計画としました。

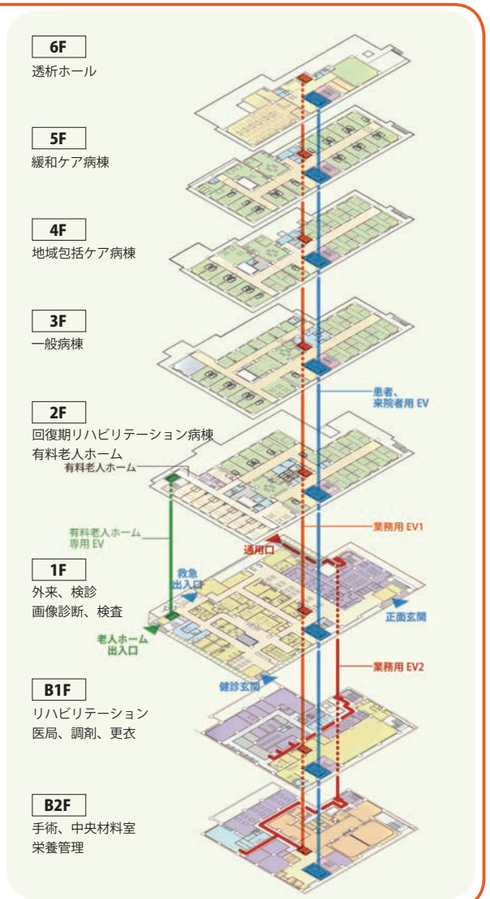
最大限のボリューム確保のための建築的工夫

要求された諸機能を納めるために、以下に示す 3 つの方法によって最大限の床面積を計画しました。

1. 法的に採光が必要ではない諸室を地階に計画
   法的に採光が必要ではない手術室を地下 2 階、 リハビリ室を地下 1 階に設けることで地上部分だけでは使い切る事ができない床面積を確保しています。
2. 階高を抑えて地上に +1 フロア
   階高を抑えることで通常であれば地上 5 階建てとなるところを 6 階建ての計画とし、最上階に透析室 (20 ベッド) とスタッフ用ホールを計画しました。
3. バリアフリー法の認定制度を活用し容積率以上の床面積を確保
   バリアフリー法の認定制度を活用することで、その敷地に建てられる最大の床面積の 1 割増しまで建てることができます。 病院建物は医療法により求められる廊下幅が建築基準法のそれよりも大きいため、比較的容易に認定を取る事ができます。 本計画では約 500 m² の緩和を受けています。

外来と健診で画像診断を共用

2 期工事部分の 1 階には健診部門を計画しました。 外来部門から完全に独立した計画とすることで、受付の混雑を解消し、健診受診者が落ち着いた雰囲気で待つことができる専用のスペースを提供することが可能となりました。
画像診断部門は外来部門と共有していますが、健診受診者用に健診側に出入口を設けることで、外来患者が同じスペースで検査を待つことなく、安心して検査を受けることができる計画としました。
また、各検査室をロの字型の廊下に面して設けることで、健診受診者が健診のメニューに従って検査室を巡ると待合に戻ってくるという、わかりやすく無駄のない動線としています。



04 市街地での現地建て替えを行った精神科病院

医療法人社団 綾瀬病院

チーフアーキテクト 田淵 幸嗣

歩道から手が届きそうな保護室と病室

建て替え前の病院は、1970 年に竣工した病棟（1 階コンクリートブロック造・2 階木造）や作業療法室、厨房などが別棟で建つ敷地と、外来棟（診察棟）のある道路を隔てた別敷地の 2 敷地で構成されていました。敷地周辺は高さ 2.5 mほどのコンクリートブロック塀で囲まれており、近隣住環境とは隔絶されていました。

2015 年に行った既存病院の耐震診断により、基準値（Is 値 0.6）を満たしていないことがわかり、建替計画についての検討がスタートしました。病院周辺は民家と共同住宅に囲まれ、隣地を購入できる可能性は低く、また敷地内にも全く余裕がありません。この場所でどのように計画をしたらよいだろうかと事業者は頭を悩まされ、ゆう建築設計へご連絡を頂きました。

新しくなる病院のイメージは明確にお持ちでした。それは、「市街地に建つ精神科病院として、現在の病院のように塀で囲まれて閉鎖的に孤立させるのではなく、開放的な病院のイメージを作り上げたい。しかし、脱走や奇声を発する入院患者に対して、周辺住民へ迷惑をかける行動への制御と病院の開放感の獲得は相反しているため、それらを両立する計画を考えて欲しい」というものでした。

建替計画は病院の現行基準で計画するため、建替後の床面積は既存に比べて大きくなります。敷地を最大限使用する計画となり、採光が必要な病室は道路側に配置することになります。左の写真の縦長の窓は保護室で、それ以外は病室です。このように病室と歩道の距離が近くなりますが、建物と歩道の間に緑地帯を設け、意識としてやわらかな境界となるような雰囲気をつくりました。

最終形を見据えた病室計画

第一期工事（既存病棟の半分を解体し、残りは継続利用）では、病床カウントされていない保護室を病床へと変更するとともに、既存の食堂の食堂加算を得られる面積を確保しつつ病室に改修することで、10 床分確保しました。
第二期工事で半分新築した新病棟では、内法面積を 32 ㎡の多床室のみの構成とし、1 床あたり 6.4 ㎡の 5 床で使用し、最終的には療養環境加算を得られる 1 床あたり 8.0 ㎡の 4 床室として使用できるよう計画しました。

病院と地域の緩衝地帯

密集した市街地に建ちながらも、敷地周囲に塀のない精神科病院の外観。病院と歩道の間に植栽による緩衝地帯を設けるとともに、病室内からの声漏れ対策や見つめられ対策として、ガラスはいずれも内側が強化ガラスで、外側が型板ガラスのペアガラスを採用しており、双方の視線が交わらないようにしています。また、保護室は遮音性能 T-4 の 2 重サッシ、病室は遮音性能 T-2 のサッシを採用しています。

医療法人社団
綾瀬病院

●事業者の思い

「敷地に余裕がない状態で、どのように建て替えを行えばよいのか」

市街地に建つ精神科病院として、現在の病院のように塀で囲まれて閉鎖的に孤立させるのではなく、開放的な病院のイメージを作り上げたい。そのような新病院への思いは明確に持っていました。築 45 年を超えた建物の経年劣化からくる印象は暗く、良いものではありませんでした。建て替えたくても敷地は密集した市街地に建つ病院です。周辺は民家と共同住宅に囲まれ、隣地を購入できる可能性は低く、また敷地内にも全く余裕がありません。このような状態で何ができるのかを知るため、依頼しました。

●建築の役割

「建て替え計画中に病床減となるが、その期間の病院の収入までも考えた計画を立案しました」

チーフアーキテクト
田淵 幸嗣

敷地がなければ既存の建物を壊し、新築するという誰もが考える内容に対して、工事期間中の病院の収入減への対策を講じるため、既存病院の調査を念入りに行いました。1 病棟あたり 70 床までは認められている施設基準を最大限利用するため、どこまで壊し、どこが使えるのか。また、現在取得している加算を継続させるには何をしたらよいか。そのことを繰り返し検討し、提案しています。また、病院の方が持たれていた新病院に対する思いについて、常に最終形態を意識しつつ、工期ごとの新築建物が最終的に求められているものとなるか。その意識がずれないように仕様を決めていきました。

休床し、既存病院を解体しながら現地建て替えを実現

建て替えへの第一歩として私たちに一番求められていたことは、「敷地に余裕がない状態で、どのように建て替えを行うか」です。最初の打合せ後、すぐに既存病棟の調査と医療安全課への確認を行いました。そして綾瀬病院がもつ諸条件を整理し、建て替え手法についての提案を行いました。
それは、「病棟を一部撤去し、工期に応じて病床数を減少させ、増改築工事を繰り返し行う」というものです。工期は 2 年必要でしたので、病床が減少している期間の診療報酬減への対応として、「既存病棟を少しだけ改修し、取れる加算の確保を行う。作業療法の休止は病院の収入が大幅に減少するため、診察棟の一部を改修してでも作業療法は継続させる」という内容も合わせて提案しました。
休床することは病院の収入減となります。しかし、いずれは建て替えをしないといけないという思いから、建て替え中の運用面を院内でご検討いただきました。細かな検討は必要だが、ゆう建築設計の提案した方針で進めていくと決断いただき、建て替え計画がスタートする運びとなりました。

05 独自の「地域包括システム」を構築し、医療・介護の複合施設を実現

医療法人歓喜会 辻外科リハビリテーション病院

チーフアーキテクト　竹之内 啓孝

辻外科リハビリテーション病院は、大阪市都心６区のひとつである天王寺区を中心に地域に密着した医療を提供する病院です。半世紀以上、地域のニーズや時代の変化に柔軟に対応し、地域の皆様と共に歩んでこられました。整形外科・リハビリテーションを中心に医療サービスを提供し、加えて有料老人ホームや訪問サービス等の介護サービスも提供されています。

本計画は、手狭となった既存の回復期リハ病棟のリハビリスペースを広げるため、外来機能を隣接する新しい敷地に増築する建物に移転し、既設建物の空いたスペースを入院患者専用のリハビリスペースとするものです。あわせて法人独自の「地域包括ケアシステム」を構築するため、既に運営されている有料老人ホームや訪問サービス等との相乗効果をねらい、外来診療・検査、通院リハビリ、退院後のリハビリ機能（デイケア）、グループホーム、デイサービス、サ高住という多様な機能を複合した建物を計画することになりました。

増築する建物に医療施設と介護施設を併設するには、それぞれの施設基準を満足させる必要があります。特に、医療施設と介護施設の動線の交錯は認められないため、医療施設と介護施設をどのように配置するかを考え、動線の交錯が起こらないように計画しました。また、限られた敷地の中で、1 つの建物に 多様な機能を配置するため、効率的な動線計画を実現するための建築的工夫を行っています。

●事業者の思い

「医療・介護・予防の様々なサービスを提供できる建物を実現したい」

増築にあたり、医療・介護・予防の様々なサービスを１つの建物で提供できる建物を実現し、利用者や患者さんの安心に繋がる建物にしたいという思いがありました。

▼

●建築の役割

「1 つの建物に医療施設と介護施設を併設すべく建築的工夫を行いました」

医療施設と介護施設を１つの建物にする場合、動線を施設基準上明確に分ける必要があります。このため動線が交錯しないよう、低層階に医療施設を、高層階に介護施設をまとめ、それぞれ専用の玄関を計画。動線を効率化すべく階段をダブル階段としました。

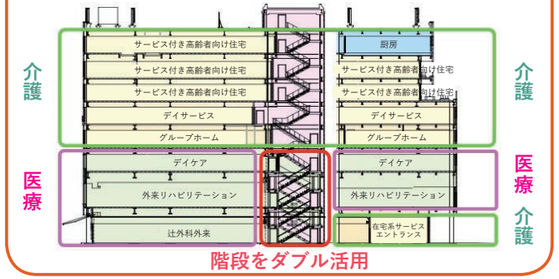
医療・介護施設各々に専用玄関を設ける

施設基準上、医療施設と介護施設の動線を明確に分ける必要があるため、外来患者さんなどが 利用する医療施設専用の玄関を建物の南側（写真上）に、グループホームやサ高住に入居されているご利用者が利用する介護施設専用の玄関を建物の北側（写真下）に設けました。

ダブル階段で効率的な縦動線を実現

限られた敷地の中で効率的な縦動線を実現するため、低層階の医療専用階段と高層階に繋がる介護専用階段を、低層階部分で同一平面スペース内に縦２層に重ねて空間を２倍に活用できるようにダブル階段を活用しています。

施設基準上、医療と介護の動線を明確に分ける必要がありますが、医療専用と高層階に繋がる介護専用の階段は、互いに合流することがないように X 状に計画しています。



06 建設費高騰！事業予算に合わせるためのプロジェクトマネジメント

医療法人匡慈会 伏虎リハビリテーション病院

専務取締役　相本 正浩

老朽化のため建替えを余儀なくされている法人は多くありますが、ここ数年の建築費高騰、コロナ禍による医療体制、さまざまな不安要素の中で事業の決断は難しい状況です。このプロジェクトでは、移転候補地を取得するにあたり事業費が現実的な数字かどうかの検証からスタートしました。運営状況から工事着手は３年後だという制約のなか、今後の病院運営の方針を実現するために必要な建物規模の検討を行ない、必要かつ無駄のない構成で建物の計画を行ない、建設事業予算にあわせるために、基本プランがまとまった２年前に第一段階の工事見積を業者から取得し、事業の現実性を確認しました。その後、鋼材の高騰や社会情勢の変動により、建設コストが変動していきましたが、地域性も考慮しながら段階ごとにコストを検証し進めました。運営されている現状調査を行い、限られた現建物の整理整頓や物品補充管理の徹底と、各部屋の適切な面積配分、物品等の保管計画などを病院スタッフと一緒に考えました。その結果、建物の延床面積を、一床当たり約 46.5㎡とすることができ、コンパクトでありながら窮屈さを感じさせない計画を実現できました。この２年間の建設費高騰のなか建設費は当初よりも若干膨らみましたが、補助金も活用し、2022 年９月に工事着手することができました。

07 透析空間を大きく変える天井・照明デザイン

医療法人社団 frontier.MED 東京透析フロンティア 大塚駅前クリニック

チーフアーキテクト　山崎 慎二

透析部門は比較的計画面積が広く、必要となる医療機器も多い為、初期投資が高くなるケースがほとんどです。そんな透析計画を事業者と考えるのは、一世一代の覚悟で新規出店される場合や、全面リニューアルしてから世代交代したいなど大きな決断のタイミングでもあります。

透析患者が病院を選ぶ時は、導入病院の紹介などが多いですが、患者自身が内覧会や相談に来られて決められる場合もあります。そこで我々設計者に求められるのは、透析室を見た患者に選ばれる“建築の力”です。

例えば、透析空間のデザインを考えるとき、透析治療に必要な設備により天井高さに制約を受けます。デザインにかかわる天井照明がベッドに寝ている患者にとってまぶしくないものに計画することが重要です。それは治療時の快適性にとどまらず、透析室の雰囲気やデザインにおいても重要なファクターとなります。

今回計画したビルの上層階での透析フロアは、大きな窓が並ぶ開放的な場所です。物理的には変える事の出来ない天井高さでも、患者が開放的な気持ちになる、のびやかな雰囲気のデザインとしたい。このような思いで天井の壁紙をグラデーションに貼分けることにより空間の広がりを表現、さらにそれを強調する極細のライン照明を配置しました。

照明によって変わる雰囲気やベッドの患者からの見え方をＣＧを用いて事業主と共有し、新しい透析治療空間を実現しました。

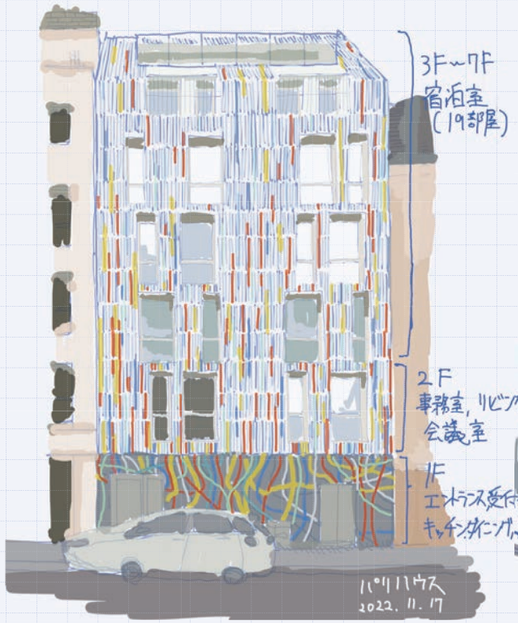
Column

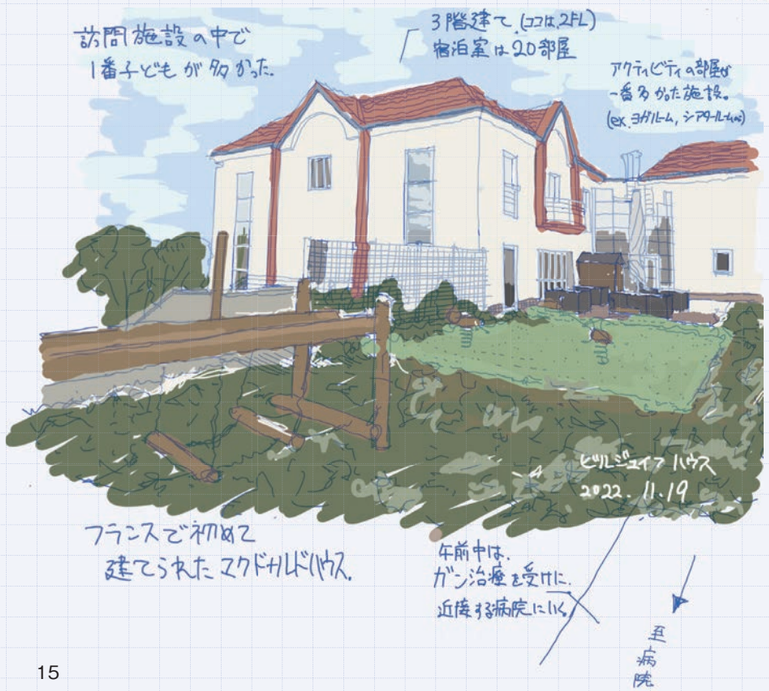
日常を知ることを大切にする　フランス、マクドナルドハウス見学からの学び

池野 雄貴

はじめに

私たちはマクドナルドハウスを設計するにあたり、既存施設のリサーチを行っています。実際の使われ方の調査や職員へのヒアリングなどを行う中で、海外施設は日本の施設とは異なる雰囲気を持っていることがわかりました。本記事ではフランスのパリハウス , リールハウス , ビルジュイフハウスを見学した際に感じたフランス、マクドナルドハウスの特徴と、見学の中で特に印象深かったエピソードを紹介します。





マクドナルドハウスとは

病気の子供とその家族のための滞在施設です。世界各地に設けられ、各地のマクドナルド法人が運営を支援しています。付き添いや病院との連携がしやすいよう病院と近接した場所に設けられることが多く、必要機能は病児の家族が宿泊する宿泊室、共用のリビング・キッチン・ダイニング、多目的室（図書室など）、病児の兄弟が利用するキッズスペース、事務室、倉庫などです。施設ごとに病児の泊まり方は異なりますが、基本的には病児が泊まれるように、エキストラベッドが配置できる宿泊室の計画とされています。また乳幼児用にベビーベッドなども用意されています。

スタッフ構成

日本のマクドナルドハウスでは、職員と同数以上のボランティアスタッフによって施設運用が行われています。一方フランスでは、ボランティアスタッフはほとんど採用しておらず、雇用されたスタッフによって運用されています。

病児の家族をケアすること

フランスでは、病児の家族をケアすることで病児もケアされるという考えかたが明確にあることがわかりました。その試みとして、アロマやマッサージ、ジャグジー浴などが利用できる“スパルーム”や、ランニングマシーンなどで運動ができる“ジムルーム”を施設内に設けています。

～ジムルーム～

～スパルーム～

日常の断片 - 見学施設の様子から日常を想像する -

～パリハウス～

2 階のリビングルームにあるレゴの人形たちが目に留まりました。
”病児たちは病気と闘うヒーロー”という考えから、施設長のフランクさんの発案で特注で作っているとのことです。このように各マクドナルドハウスは、それぞれの施設長や職員のアイデアによって建物の雰囲気が異なります。
建物が建ったあとも、病児とその家族のための空間が考えられていました。

～リールハウス～

幅 2 m くらいの大きな TV がリビングの横においてありました。
サッカー W 杯を観戦するために買ったばかりだそうで、職員同士でどこに置くか話していたところ、気づけばダイニングにいる病児の親やその兄弟たちも集まり、配置決めの話がはじまりました。和気あいあいとした雰囲気で、普段から利用者とスタッフがよくコミュニケーションをしていることが想像できました。

～ビルジュイフハウス～

さまざまな人種の親子を見かけました。
あるアジア系の女の子は洗濯機を利用するお金を頂戴とスタッフに声をかけていました。その親子は元々ホームレスで 1 泊 10 € の宿泊費も払えませんが特別に対応をしているとのことです。親と近くに住み、食事もできているもののその子に笑顔はなく、どうしたら彼女らを笑顔にできるのか、建築にできることは何なのかと考えさせられました。

おわりに

マクドナルドハウスの見学をとおして、その特徴の一つである「病児の家族をケアすることで病児もケアされる」という考えとその実践を体験することができました。私はこのことに共感するとともに、他施設でも通じる幅広い考え方だと思いました。また、異なる文化を背景とした建物を利用する人々の日常のワンシーンを目の当たりにしたことで、改めて日常を想像することの重要性を実感しました。
今回のように時には遠くへ行き、実際に見て、知るということを大切にしていきたいと強く感じています。

Ikeno Yuki

病 院

神戸大山病院

兵庫県

岡山中央病院

岡山県

西条中央病院

広島県

横田記念病院

富山県

運動器ケア　しまだ病院

大阪府

島の病院　おおたに

広島県

堀ノ内病院

埼玉県

新須磨病院

兵庫県

横浜じんせい病院

神奈川県

藤民病院

和歌山県

丹後中央病院

京都府

谷川記念病院

大阪府

たずみ病院

兵庫県

はりま病院

兵庫県

王子回生病院

兵庫県

北山武田病院

京都府

桃仁会病院

京都府

十条武田
リハビリテーション病院

京都府

なごみの里病院

京都府

明石回生病院

兵庫県

精神科病院

ホームページでも詳しくご紹介しています

辻外科リハビリテーション病院

大阪府

京都ならびがおか病院

京都府

そよかぜ病院

徳島県

綾瀬病院

東京都

明芳外科
リハビリテーション病院

兵庫県

ほのぼのホスピタル

徳島県

宮本病院

和歌山県

東武丸山病院

埼玉県

宇治武田病院

京都府

丹比荘病院

大阪府

田辺病院

京都府

もみじヶ丘病院

京都府

八尾はぁとふる病院

大阪府

オレンジホスピタル

大阪府

宇治おうばく病院

京都府

京都東山老年サナトリウム

京都府

ゆう建築設計の 福祉施設

障害

新みわ翠光園　京都府

グループホーム 菜の花　京都府

はーもにー　群馬県

ワンロック　徳島県

練馬高野台福祉園　東京都

こころみ学園　栃木県

今川学園グループホーム 大阪府

ライフアシスト　京都府

高齢

つつじの丘　奈良県

聖アンナ館　千葉県

グランマーレせいほう　京都府

天橋園　京都府

菊水ビラ　滋賀県

しぎのさと恩智　大阪府

オービーホーム高丸　兵庫県

鳥羽ホーム　京都府

考えたことを広く伝達する

どの分野においても、計画で考えたことを広く知ってもらうことが大事だと私たちは考えています。プランからディテールまで、多くの方に知ってもらえれば、私たちが設計を依頼されなくても、そのノウハウを使って、それぞれに合った計画をより合理的に行うことができます。そのような思いから全国の事業者の方へこの冊子をお送りしています。
また、日々の情報もホームページや SNS で発信していますので是非ご覧ください。

facebook　twitter　Instagram

Design Study

建築計画が固まっていくには、事業者、職員との議論、現地調査、様々な角度からの検討が必要です。ゆう設計ホームページでは設計コンセプトや作品紹介で検討結果を社会へ伝達しています。
一方、設計を進める過程で幅広い検討が行われていますが皆さんへ伝えていない事項も多くあります。Design Study ではこれら検討過程での様々な情報をお伝えしています。

https://www.eusekkei.co.jp/designstudy

ゆう建築設計のセミナー案内

医療専門設計事務所による医療法人向けセミナー

病院特集 医療環境を支える建築セミナー

東京会場

第1弾 透析
日時 2/18（土） 14:00～17:30（受付 13：30～）

快適な治療環境のその先へ
ー病院透析で何が起こっているかー
講師：木下 博人

お申込みはこちら
透析セミナー参加申込み専用 URL
https://www.eusekkei.co.jp/seminar/19148
スマートフォンからもお申込みいただけます

第2弾 病院企画
日時 2/25（土） 14:00～17:30（受付 13：30～）

思いを実現させる手掛かり
ー設計事務所が伝えたい選択肢ー
講師：田淵 幸嗣
加藤 クリム
玉井 英登

お申込みはこちら
病院企画セミナー参加申込み専用 URL
https://www.eusekkei.co.jp/seminar/19152
スマートフォンからもお申込みいただけます

セミナーページの参加申し込みフォームに必要事項をご記入の上、お申込みください

お気軽にご相談ください

ご相談はお電話のほか、メール・ホームページのお問い合わせフォームからも受付しております。
お問い合わせには担当者より折返しご連絡します。

Tokyo Office
TEL 03-6721-5430

Kyoto Office
TEL 075-801-0022

e-mail　：office@eusekkei.co.jp
ホームページ：https://www.eusekkei.co.jp

時空読本　バックナンバー

No.35　コスト
コストを意識した
設計手法
2022年7月発刊

No.34　透析
特集
感染リスクを低減する
透析空調システム
2022年1月発刊

No.33　精神科
時代を切りひらく
精神科医療設計
2021年9月発刊

No.32　高齢者
特集
「利用者の建築」から
「利用者+介護者の建築」へ
2021年3月発刊

No.31　医療
中規模病院の
様々な建替手法
「医療+介護」の時代へ
医療法人が行なう
高齢者の住まい
2021年2月発刊

No.30　障害
特集
建築から見た
「すまいの特性」
2021年1月発刊

既刊の時空読本は以下のURLよりダウンロードできます
https://www.eusekkei.co.jp/jikuh

書籍案内

知的障害者施設
計画と改修の手引き

著者　砂山憲一
単行本(ソフトカバー)160P
出版社　学芸出版社
発売日　2017/10/22
本体価格　3500円＋税